

Title	日本史の研究第二輯(三浦周行著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.156- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國民たるを自覺せる點に於て本邦史上の一大進歩を現した時代」(序文)であることを明にせられてあるものである。續編は最初に出版された日本中世史第一卷の卷末にその豫告まで載せてあつたが、遂にその發表を見なかつた稿本であつて、本書に於ては、初めに鎌倉幕府草創當時の東國武人の狀況を述べ、更に武人間の新舊主義の衝突を詳述し、之が重要な一原因をなして承久の亂が起り、此の亂に依て武家主義が確立し、皇室以外に對する忠君の觀念の公認さるゝに至つた事情を説き、又封建制度に就て記してゐる。これはかつて豫告された日本中世史第二卷の論述事項と大體その内容を同じくする様である。日本中世史第一卷は出版後多年を経て現存に於ては之を手に入れることは仲々困難であつたが、今回この日本中世史の研究の中にその續編と共に載せられたことは誠に喜ぶべき事である。

の變遷を論じ徳川初期の道徳史に及ぶ」等の諸論文は何れも風俗文藝政治宗教等の文化現象を時代的全般的觀察の下に論述したものである。附録には博士の史學に就ての見解を述べた「歴史研究に就て」「歴史の功過」「歴史の効用」「歴史上戦争の影響」等の諸論文及び「日本文化の過程」「日本史稿」「日本歴史講義」「日本書紀々年考」等多くの未定稿本を載せてゐるのである。

以上は本書の極めて大略の内容を述べたに過ぎないが上述の外に更に四五の隨筆が載せられてゐる。例へば「さまざまの秋」「新嘉坡より」等であつて此等を一讀すれば博士が又文章の人であつたことを知り得るのである。最近盛になつた經濟的又は社會的方面の研究を博士が重視せず比較的此等を閉却してゐる點や、博士の歴史に就ての見解に矛盾の存する點などがあるとしても、此等は本書に依て我々の教へらるゝ所より見れば少しも本書の價値を傷けるものさと思はれないのである。兎に角博士の日本中世史に關する全論文集の出版された事は學界を益する所が甚だ大であると思ふ。(今宮新)

日本史の研究第二輯

(三浦周行著
岩波書店發行)

第二編に於ける諸論文の中「東西の宗教改革」「法然上人と聖フランシス」の二編は、博士がその専門の立場より日本と西洋の比較をなしたもので共に注意すべきものである。「鎌倉時代を三期に分たば」「足利時代を論ず」「東山時代に於ける一縉紳の生活」「三河物語の武士道」等の諸論文は史料を自由に使用して社會全般より之を論述したものであつて博士が時代の全局を見ることの巧であつたことを示すものである。又考證的論文としては「吾妻鏡の性質及其史料としての價値」「足利時代に於ける堺港」等のものがある。其他「文藝史上の鎌倉時代」「鎌倉時代に於ける人文の地方的傳播」

本書はさきに公にせられた「日本史の研究」の續編として發表せられたものである。

「鎌倉時代の布教と當時の交通」「鎌倉時代に於ける布教の徑路」「足利時代と肖像畫」「都鄙の文藝」「世の替はり目と京都」「服忌制

前編所收の論文の範圍は、大正十一年一月迄の業績に止るが本編には主として其以後の既發表及び未發表の日本史に關する諸論

文を收め偶一二の前編の採録に漏れたものをも加へたものであるといふ。又編纂の組織は、略前編に准じてあるが、其前後に依て異なる主要の點は「皇室」を編首に掲げたこと、前編の「歴史地理」を「都市及び港灣」に改めたことである、

即ち

第一編 皇 室 第一章 皇位及び皇統(四項)

第二章 皇室と國民(二項)

第二編 文化 批判 第一章 中世の文化(四項)

第二章 近世の文化

第三章 明治大正の文化(四項)

第四章 思想及び信仰(五項)

第五章 學問及び藝術(四項)

第六章 社會及び政治(十項)

第三編 人物 批判 第一章 概論

第二章 各説(八項)

第四編 對外 關係 第一章 日明關係(三項)

第二章 日鮮關係(四項)

第三章 外寇と外征(二項)

第五編 都市及び港灣 第一章 都市の發達(三項)

第二章 港灣の發達(二項)

第六編 史料 研究 第一章 記録及び文書(三項)

第二章 圖書(三項)

第三章 史料採訪(二項)

今個々の論文に就て紹介を試る事は到底許されないから、唯「日

本史學史概説」(第二編第五章の一項)に依て本書の全豹を窺ひ合せて本書の價値を裏書したいと思ふ。

著者は劈頭に「國史編纂の盛衰は正に文化の消長と相並行するものである」と説破せられ、古代固有文化の時代には、所謂語部に依て神話傳説が言ひ繼ぎ語り繼がれるに過ぎなかつたが、大陸文化の輸入せらるゝに及んでは、對等の國交を結ぶべき外交上の必要より律令地誌國史の記録及び編纂の事業が起つたのである。然るに國史は三代實錄以後全く其編纂が絶え、其他の諸書も略これと運命を共にした、それは抑何の故であらうか。第一に考へなければならぬことは、支那の刺戟が薄らいで來た事であらう。是等の編纂事業の開始されたのは、支那との國交の影響に依るのであるが、此頃となつては支那は唐の末期に當り争亂屢起り、國內分裂し、國民の疲弊より其文化の刺戟も昔日の比ではなく、宇多天皇の寛平六年には參議菅原道眞の議に依て推古天皇以來の國交も斷絶したのである。我國と唐との間に對等の國交を締結せんが爲めの政策の加味された國史の勅撰等の業が自然に中止を見たのも亦當然の成行ではあるまいか。その結果獨自の文化の芽生さなり文章經國の思想は文學の地位の向上さなると共に史學の衰を見せることとなつて、僅に政府當局の記録に留り(外記日記内記等)又朝儀等に列つたものの日記を残すこととなつた。然るに此時代の中頃より政治が形式的さなりこれに對して官職に従事するものを始め一般社會も世襲的に固定したから、是等の日記を中心として、家禮の從屬關係が成立し日記の性質は半公半私のものとなつたが、それらに記された儀式は表面の事で、裏面に行はるゝ政争等には及

んでゐない(併し又中には院政時代の中右記(中御門宗忠)小右記(小野宮實資)臺記(藤原賴長)兵範記(平信範)や鎌倉初期へかけての玉葉(藤原兼實)明月記(藤原定家)等の例外もないではない)。

一方私撰の歴史としては扶桑略記三十卷、武家時代となつてからは鎌倉幕府の吾妻鏡、室町幕府の花營三代記等があり又此時代には國文、和歌が發達すると共に、これを善くする才媛輩出し、漢文に比して流暢なる國文を以て宮廷の内事を細叙した物語が行はれ男子の日記と相對し更にかゞみの一史體を生んだが、それらは何れも文化の中心たる京都の朝廷を取りまく貴族社會に限らるが故に、記録の範圍も自然これを出でないが、武家時代に入つてからは物語は其時代の特徴たる武士の生活や戰爭を取扱ふに至つたのである。

更にこれを思想的に見るならば、古代に於ては唯事實の眞を傳ふるさいふ外に、何等の理想も見出せないが、平安朝時代より物語類には宮廷の男女を始めとして、物のあはれを知るより起る戀愛關係の描寫に浮身を窺したものである。此時代の末院政時代に源平合戦を繰返されて、至尊の御幽閉、攝關の左遷を始め、驕る平氏敗竄等、目まぐるしき迄に榮枯盛衰を如實に示された人々は、さなきだに此頃勃興した彌陀信仰及び末法思想の爲に厭離穢土の厭世觀を煽られて、日本國民天賦の樂天觀に曇を生ずるに至つた。是時に當つて佛法主義に貴族の國家觀を加味して現はれたものが史論體の歴史愚管抄七卷である。

然るに武家政治の出現は公家武家の政治上社會上の對立となり盛情の疎隔となり、利害の睽離となり次第に公家の名分觀を刺激

して、承久以來幾度か正面裏面の衝突を重ね、結果は、それが歴史に反映して、神皇正統記の如く史實を以て南朝の正統たる所以を立證せんを試むるものを出したのである(愚管抄と神皇正統記とは史論體の歴史の双壁である)足利幕府が優勝の地位を占むるに及んでは、學問さいへば儒佛の書を讀むのみにして武士を始め社會は前よりも一層國家的に盲目であつた。斯る時代にあつては、國民は自國の歴史を知らうともせねば、需用のなきところ、歴史も世に出でず、唯一時的地方的の戰鬪を叙した戰記軍記の類が幅利かせてゐた丈であつて、僅に貧弱なる年表の智識を有してゐても相等歴史に通曉す云はれた位である。其名分に暗かつた事、前後是時程に甚しきはなからう。

近世に至つて、幕府の衰亡と共に國民の國家觀が甦り皇室を中心とする文藝の復興となり、其結果は期せずして國史の尊重となり神皇正統記の詩いた種が漸く結實期ともなれば、收獲期ともなつたのが此時期である。本朝通鑑も大日本史も皆其成果の一つとして見るべきであらう。而かも近世初期の文化は尙ほ儒學の影響を脱却するに至らなかつたが中期より國學が勃興すると共に、更に古代固有の文化を尊重する餘りに、古代史殊に神話や宣命祝詞等の研究が重んぜられ出して、此方面から國民固有の精神を捕捉するに力められたこと、最後に

併し又一面には文化の發展と共に史料尊重の風を生じて古文書記錄の探訪となり史實の精練なる考證となりそれが明治時代に超越して大政復古の改革精神と共に、修史事業の開始となつて現れた、考證の風一世を風靡した事は正に前代無比であらう。それらは

尙ほ所謂漢學國學の影響を免れないものであつたが、其前後から西洋の史學研究法も次第に感化を及ぼし、殊に文化史の聲が高くなる一方には、唯物史觀の青年史家に及ぼす魅力も侮り難く、今や其混戦状態にあるといつてもよからう。併し靜かに史學史の動きを考へるこ一般文化發展の過程と同じく、古來國內の事情や外國の影響が錯綜して或る時代に一方に傾いたものが、他の時代には閑却されて、他の新しきものと代り、反動に次ぐに反動を以てしてゐるが、何れは堅實なる歩みを取つて中正に歸することであらう……

こ結んで居られる。而して本項の明治時代以後に詳細なのは現代も最も接近し、其知識が國史學の將來を卜するに最も役立つべきものなるに拘らず、これに關する適當なる著書論文等の缺如するに依るこの博士の心盡しである(即ち、明治政府の修史、大日本史料大日本古文書の編纂出版、明治の新史風、史學發表機關、史潮の變遷、修史の缺陷、文化史の流行等を詳細に述べて居られる)本項は僅々百餘頁に過ぎないが我國の歴史編纂の變遷は極めて手際よく叙述せられて居る(國史編纂の盛衰は正に文化の消長と相並行するものであるこの定義は多少抽象に失する嫌がないでもないが)常に學界の先導として立たれる博士に敬意を表するに共(菊判本文一三三八頁、定價九圓五拾錢)。(淺子勝二郎)

古代日本人の世界觀

(城戸幡太郎著)
岩波書店發行

日本の言語と神話

本書は、昭和三年著者が法政大學で講じた民族心理學の演習として古事記と日本書紀との解釋をなしたのを動機として書いた諸論文之を完成せんがため書いた原稿を一括したものである。著者はいふ。ヴェントにより組織された民族心理學は、一種の精神的人種學ともいふべきものであり、その發達の法則を稱するものはある假定された標準により段階づけられた種々なる民族精神の特徵にすぎぬ。社會は記録をもち、精神的遺物の多くは此記録によつて傳へられる。もし此記録が、失はれば、それと共に歴史がなくなる。記録は、理解される必要あり、その解釋の方法は、教育に於ける言語の理解に俟たねばならぬ。歴史は、吾人にさり意識的存在であるかぎり、同時に言語的存在である。言語は、歴史的社會的實在性として最も具體的特殊性をもつ存在である。日本語には日本語の特性がある。かゝる言語の特性の研究により精神生活の歴史性を認識なし得る。かゝる文獻的解釋學としての心理學の問題を特に民族心理學に對し考古心理學と稱したい。民族心理學が人間精神の發達をその原始的なるもの假定によつて説明するとすれば考古心理學は、人間精神の歴史をその古代的なるものの發見によつて解釋する。本書により古事記及び日本書紀に表現されてゐる日本人のかゝる古代的性格を發見せんとする。以上が著者の本研究により企圖した所である。第一章、國語の表現と